

営農情報

第 8 6 号平成 2 2 年 6 月 1 日発行

(イチゴ)

本年度は春先から雨が多く、親株床の過湿によって親株に生育おくれや甚だしい場合根傷みが生じ、ランナーの生育が遅れている。また4月中旬の霜によりランナーの先端が枯死するなどランナー発生不良が生じている。

アブラムシの発生は多く、一部ではカキノヒメヨコバイによる心葉の展開不良ほ場が見られており、親株床の排水対策や病害虫防除を遅れないように行う。



排水不良ほ場で根が黒変した親株
霜によるランナーの焼け



6月の管理方針について

「病害虫の無い苗づくり」、「8 mm 以上の良苗づくり」、「作型に合わせた苗づくり」を目標とし、育苗管理を行う。特に「炭そ病」については育苗期の対策が重要である。

本年のように雨が多い年は、炭そ病はもちろん疫病などの土壌水分が多い場合に蔓延しやすい病害について十分な対策をする。

収穫が終了したハウスは、早めに収穫株を除去し、有機物の投入を行う。

専用親株の管理について

- 親株床の排水溝の整備など、排水対策を十分に行う。
- 薬剤防除を定期的に行う。（平成 22 年 4 月イチゴ薬剤防除こよみ参照）
- 降雨による感染拡大も考えられるため、降雨直前の防除を基本とし、降雨後も防除する。
- 軟弱徒長防止と「炭そ病」対策として追肥は控える。ただし、プランター等で肥料が少ない場合は、ランナー発生促進のため、液肥の追肥を行う。

鉢上げについて

【 さしポットの場合 】

目標鉢上げ時期	8月処理開始の株冷	6月10日まで
	8月処理開始の夜冷・9月処理開始の株冷	6月15日まで
	9月処理開始の夜冷・普通ポット	6月20日まで

- 子苗採取前には、「炭そ病」の予防防除を必ず行っておく。
- 本葉2～3葉で3～5cm発根した苗（それ以上伸びていれば切る）を用いる。
- ワラ被覆全面マルチ床では、採苗1週間前から灌水してランナーの発根を促進する。
- 活着を良くするため、鉢上げ前日に培土を十分湿らせておく。
- 極端な浅植えや深植えはさける。
- 鉢上げ後7～10日間程度は寒冷紗（610番）等で遮光する。
- 活着までは、葉水程度のかん水を1日に数回行う。
- 「炭そ病」対策のため、採苗は雨の日は避け、気温の低い早朝に行う。
曇天日が鉢上げに適している。曇天が続いた後の晴天日の鉢上げは活着が遅い。
- 採苗後は、苗（根）が乾燥しないよう日陰に置いておき、できるだけ、採苗当日に鉢上げするようにする。
- 採苗当日に鉢上げできない場合は、苗が乾燥しないよう（湿らせた新聞紙に包む・ビニール袋に入れる）にして予冷庫内で保存することもできる。（2～3日で3日程度まで）
- 活着後から「炭そ病」の予防防除を行う。

【 すけポットの場合 】

鉢受け作業時期	5月30日まで
切り離し目標時期	6月15～20日
雨除けハウス・高設採苗・棚上での採苗の場合は遅くまでできる。	

- 根がこぶ状に発根した苗を、順に鉢受けし、海苔みす等で止める。根が伸びすぎている苗は鉢上げに使用せず、葉のみ除去しておく。また、ランナーが極端に細い子苗は使用しない。
- 降雨などで硬くなった培土は、根の伸長が悪いので、鉢土をほぐす。
- 鉢受け作業直後に必ず「炭そ病」の防除を行う。
- 必要数の子苗を受け終わったら、ランナーの先端をピンチする。



鉢受け状況

- 次に、子苗の徒長防止と病虫害予防に親株の全葉摘除（プランターでの親株育成の場合には不要）と直後に「炭そ病」の防除を行う。
- 鉢受け期間中は、「炭そ病」の定期的な防除と、鉢土が乾燥している場合はかん水を行うが、子苗への追肥・下葉除去は行わない。
- 子苗の切り離しは、最終の鉢受け後 10～15 日目頃（根づいた頃）を目安に行う。ただし、降雨の日の切り離し作業は絶対に行わない。

鉢上げ後の管理について

【 肥培管理 】

「炭そ病」に感染していない苗作りのため、窒素過多にならないような肥培管理を行う。

- 活着したら追肥（置き肥）を開始するが、梅雨時期には絶対に多肥状態としない。肥料溶出が緩やかで、少量の置き肥が好ましい。
- 窒素が効きすぎたり、軟弱徒長した苗ほど「炭そ病」に罹病しやすいので、発生確認時には追肥を控える。

【 施肥管理例 】 I B 化成の場合（3 寸・3.5 寸ポリポット）

株冷・夜冷 （8月に低温処理開始作型）	6月下旬に 1～2粒	7月下旬～8月上旬 液肥（濃度500倍～）で調整
普通ポット等 （9月より低温処理開始作型）	6月下旬に 1～2粒	7月下旬に1粒追加

普通ポット(9月29日以降作型) 6月20日(1粒) + 7月10日(1粒) + 7月25日(1粒)

【 かん水 】

- 過湿とならないよう、鉢土の乾燥程度（根の状態）を常に観察してかん水を行う。
- 活着後は朝主体のかん水とし、炭そ病予防と徒長防止のため、夜まで濡れ状態にしない。特に、夕方のかん水が必要な場合は、葉水程度とする。
- 小さいポットや棚式育苗は乾きやすいので、少量多回数かん水に心掛ける。

【 葉かき 】

- 葉数3・5～4枚を確保するように、古葉の葉かぎを行う。雨の日は絶対にしない。
- 葉かぎ後は、必ず、当日もしくは翌日に「炭そ病」の防除を行う。

【 炭そ病対策 】

「炭そ病」は、病原菌が雨やかん水で発病株から周辺株に飛散し、感染・発病する。

- 炭そ病菌の分生胞子は濡れた状態で3～6時間で発芽し、その後6～9時間で付着器（植物体へ侵入する器官）の形成を開始するため、半日程度（夕方～朝）9～15時間でイチゴに感染する。
- 濡れている時間を短くするため午前中を中心としたかん水を行い、夕方には乾いた状態とする。

- 定期的な防除・降雨前後の防除に心がけること。
- ポット間隔をできる限り広くとる。過剰施肥をしない。育苗床の排水対策を講じておく。
- 雨よけ育苗することで、病原菌の飛散を抑えることができる。

【カキノヒメヨコバイ対策】

葉色の抜け、波打ち、縮れなどの症状はカキノヒメヨコバイによる被害である。育苗床周辺の雑草を除草する。

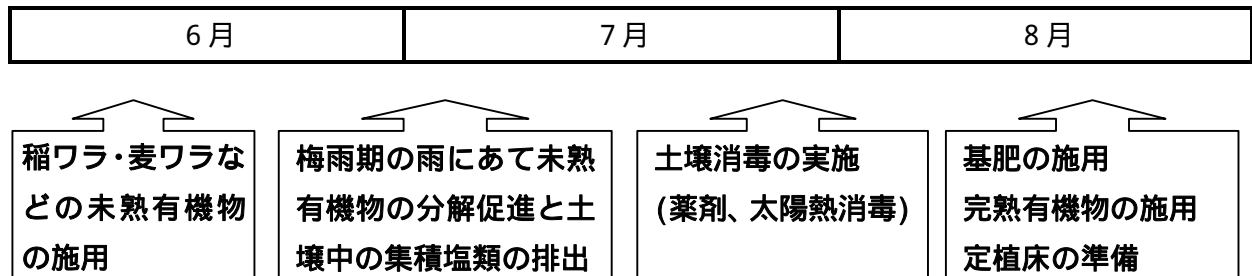
【土づくり・土壤消毒】

●有機物の施用のポイント

- 前作の栽培で消耗された土壤有機物を補給。(地力の回復)
- イチゴ栽培で消耗する土壤有機物は堆肥約 2 t / 10 a に相当。
- 稲ワラ、麦ワラ、未熟な家畜ふん等の有機物は、梅雨前に投入して土壤混和し、雨にあてる。(分解促進、塩類溶脱)

●土壤消毒

- 薬剤による消毒、太陽熱消毒のいずれかを実施する。



農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!